

報告番号

※

第

号

## 主論文の要旨

論文題目

田村俊子と張愛玲の比較文学的研究  
——女性作家が〈見せる〉こと——

氏名

王 勝群

### 論文内容の要旨

本論文は比較研究の視座の下に、日本と中国の二人の女性作家田村俊子と張愛玲を取り上げ、彼女たちが女性作家として存立することと、今まで引き継がれた視覚イメージの形成との相関関係や、各自の作品における〈新しい女〉／〈新女性〉の形象、女性のセクシュアリティと両性関係などについて考察を行ったものである。

本論文は、I部（1章、2章）、II部（3章から5章）、III部（6章、7章）から構成されている。

第I部「女性作家のイメージ形成——化粧／衣服というメタファー」では、化粧／衣服というキーワードのもとに、田村俊子と張愛玲の活躍期という「女性作家」が生れる（または作られる）歴史的現場へ遡り、同時代の文壇やジャーナリズムとの共謀／共犯関係において、いかにしてそれが厚化粧／奇装異服という視覚イメージの形成を促したかを検証した。その上で、視覚イメージと女性作家の自己定立、および彼女たちの〈書くこと〉とのかかわりを論じた。

第1章「「厚化粧」の田村俊子——つくる／つくられる女作者」では、〈化粧〉をキーワードに、田村俊子の代表作「女作者」に注目しつつ、まず全盛期の田村俊子の言説・行動およびその同時代の文脈における意味を考察し、彼女の創作と〈化粧〉との隠喩的対応関係がいかに築き上げられたかを考察した。次に、長編「あきらめ」との比較を通して、「女作者」における〈化粧〉の意味を分析した。最終的に、田村俊子が〈化粧〉を通して、女性性と〈書くこと〉との人為的な関係性を転覆させる可能性を明らかにした。

第2章「「奇装異服」の張愛玲——語る／語られる女性作家」では、1940年代の上海での張愛玲の活躍期に遡り、その「奇装異服」のイメージが当時のメディア状況や言説状況において、どのように生成・流布したか、その過程で作家自身の意図がどのように関与したかの一端を明らかにした。また、〈衣服〉と張愛玲文学とのかかわりを、

作家自身の語りおよびその「奇装異服」の表象において検討する。その上で、1980年代後半から90年代前半にかけての中国大陸における張愛玲再評価の風潮において、〈衣服〉が象徴する張愛玲文学の特質がどのように語られたかについても、当時の言説背景に照応しつつ考察した。

第Ⅱ部「〈新しい女／新女性〉への眼差し」では、〈新しい女／新女性〉(New Woman)という共通テーマのもとに、それぞれ田村俊子の「あきらめ」、「炮烙の刑」と張愛玲の「五四遺事」を、時代背景を踏まえた上でテクスト分析を中心に考察した。それによつて、明晰な定義に欠けるにもかかわらず「新しい女」、「新女性」とひとくくりにされていた女性の集合の内部における亀裂と多様性が、それぞれのテクストにいかに提示されたかを明らかにした。

第3章「「家出」をしない〈新しい女〉——田村俊子「あきらめ」論」では、「家出」というキーワードを手がかりに、『人形の家』の日本初演同年に『大阪朝日新聞』(1911年1月1日～3月21日)に連載された田村俊子の文壇デビュー作「あきらめ」を取り上げ、作品における〈新しい女〉表象を考察するものである。そこで、「新しい女の時代幕開けの象徴的な文学空間」とされるこのテクストにおける〈新しい女〉の形象に焦点を当て、彼女たちの異なる「生」と主体性のあり方を分析した。とりわけ、女主人公・富枝の選択に注目し、彼女があえて「家出」を拒否する理由について検討する。その先に、彼女が〈女戸主〉になることの可能性と困難を追究し、「家出」をしない〈新しい女〉表象の特徴を明らかにした。

第4章「〈新しい女〉と揺らぐ「自我」——田村俊子「炮烙の刑」論」では、男女間の齟齬・相剋に焦点を絞った「炮烙の刑」(1914)を取り上げ、女主人公・龍子をめぐっての同時代の評価軸の揺れを念頭におきつつ、その複雑な「自我」のあり方を分析し、平塚らいでうらによる〈新しい女〉の理想に収まらない龍子の「自我」の両面性を明らかにした。そして、新しい女／古い女という正反対な評価に晒されていた作家田村俊子自身をめぐっての当時の〈新しい女〉言説を辿りつつ、彼女の位置づけと評価の揺らぎを探っていった。

第5章「記憶・空間・新女性——張愛玲「五四遺事」論」では、張愛玲の短編「五四遺事——羅文濤三美団円」(1957)を取り上げる。まず、〈記憶〉をキーワードに、このテクストの背景に当たる「五四」に関する張愛玲の言説を分析し、〈新〉／〈旧〉を二律背反的に取らず、逆に伝統から現代への連續性を見据えるという張愛玲の五四観を確認した。次に、時代背景と絡めつつ、テクストにおける西湖の空間を分析し、雷峰塔の象徴的意味を検討したうえで、〈新〉と〈旧〉が同時に入り混じっている西湖(中国そのもののメタファー)の特質を解明した。その上で、テクストにおける新女性の表象、とりわけ女主人公・ミス范の形象を分析することを通して、旧女性との境界線がきわめて曖昧な五四新女性の内面の空虚さ、主体性の希薄さを洞察した張愛玲

の新女性観を浮上させた。

第Ⅲ部「移動の空間、不確かな〈眼〉、引き裂かれた性」では、女性のセクシュアリティや男女間の関係構造を追究する田村俊子の「生血」と張愛玲の「赤薔薇・白薔薇」を考察した。それぞれのテクストでは、個々の空間を通して構築されている両性の磁場において、男女の関係性に悩む女性と男性が主人公とされている。本部では空間およびそこにある男女の関係に対する詳細な分析を通じて、前景化されている〈眼〉（見る／見られる）の構造におけるジェンダーの力学を追究した。

第6章「彩られた空間——田村俊子「生血」の視覚世界」では、男性と初めての性交渉を行った女性の翌日の一日を描いた田村俊子の短編「生血」(1911)を取りあげる。この作品は従来の研究では主に嗅覚や触覚などの「第二感覚」のアプローチから考察されてきたが、本稿では視覚を中心に、女主人公・ゆう子の「目」に寄り添い、テクストにおける重要な空間と色彩に注目する。具体的には、自己凝視の空間「宿屋」と相互凝視の空間「町」および見物の空間「玉乗り小屋」といった物語が進行する主要な空間において、〈赤〉・〈白〉・〈黒〉などの色彩がゆう子にどのような刺激を与え、またそれによって彼女にどのような心象変化を起こっているかを分析した。それを軸に、同時代言説を踏まえつつ、作中のいくつかの象徴的な場面を考察した上で、ゆう子が抱えている処女観念と「汚れ」意識の特殊性を論じた。最終的には、テクスト「生血」の斬新さは、女性が抱えている性／生の困難さを、社会的制度や両性間の力関係のレベルにおいてのみならず、もっぱら女性自身の内部へ探るところにあると主張したい。

第7章「揺らめく空間、自己分裂の舞台——張愛玲「赤薔薇・白薔薇」論」では、張愛玲の短編「赤薔薇・白薔薇」(1944)を取り上げる。先行研究は、赤／白という色彩のコードに象徴される二分化したジェンダー構造を問題視するものが多い。対して、本章は作中の空間（空間の構造、性質）を分析の手がかりに、男主人公・振保に焦点を当て、諸空間における振保と女性登場人物たち、および彼自身との関係性に重点を置いた。まず、テクストにおける公寓<sup>アパート</sup>と一戸建てという主要な空間を詳細に考察し、それぞれの空間に対応する振保と赤薔薇・嬌蕊、白薔薇・煙鸕などの女性登場人物との関係を検討した。その上で、作中のもう一つの重要な空間——鏡という虚空間を分析することにより、「最も理想的な現代人」である振保が晒されている自己分裂の危機を提示した。